

【第6回「忘れられない看護エピソード」入賞作品発表】
心温まる感動的な看護エピソード
応募 3,305 作品から最優秀賞などが決定！

公益社団法人 日本看護協会（会長：坂本すが／会員 70 万人）は、本日、5 月 8 日（日）に日本看護協会ビル JNA ホールで、第 6 回「忘れられない看護エピソード」表彰式を開催し、入賞作品の発表や受賞者の表彰を行いました。

「忘れられない看護エピソード」は、厚生労働省と日本看護協会が主催する「看護の日・看護週間」の中央行事として、看護職、一般の方々が看護の現場で体験した心温まるエピソードを募集し、入賞作品を表彰するものです。第 6 回となる今回は、全国各地から 3,305 作品が集まり、厳正な審査を経て入賞作品が決定しました。

表彰式は、来賓や抽選で招待された観覧者ら約 200 名が見守る中で行われました。最優秀賞、内館牧子賞の表彰に加え、剛力彩芽さん（女優）の「看護の日」PR 大使任命式、大使として初仕事となる最優秀賞受賞作の朗読、トークショーを行い、華やかな式典となりました。

■最優秀賞

【看護職部門】	専属ナース物語	庄崎 美恵さん	37 歳	〈長崎県〉
【一般部門】	静かな勇氣	高野 裕子さん	49 歳	〈滋賀県〉

■内館牧子賞

【看護職部門】	「教える」よりも「聴く」	中村 凡子さん	44 歳	〈富山県〉
【一般部門】	未蕾（みらい）	岡森 陽子さん	31 歳	〈大阪府〉



2列目左から：厚生労働省大臣官房審議官 梅田珠実、剛力彩芽さん、日本看護協会会長 坂本すが
前列左から：中村凡子さん、庄崎美恵さん、高野裕子さん、岡森陽子さん

＜報道関係のお問い合わせ先＞
第 6 回「忘れられない看護エピソード」広報事務局

担当：渡辺

電話：080-2181-9335 mail：kazuya.watanabe@dentsu-pr.co.jp

■入賞者一覧（敬称略、年齢は応募時）

部門	賞	作品名	受賞者			
看護職部門	最優秀賞	専属ナース物語	しょうさき 庄崎	みえ 美恵	37歳	長崎県
	内館牧子賞	「教える」よりも「聴く」	なかむら 中村	なみこ 凡子	44歳	富山県
	優秀賞	人生を変えたことば	こばやし 小林	かよこ 加代子	37歳	東京都
		お湯加減はいかがですか？	ながた 長田	みほ 美保	54歳	東京都
		神様の声	おおい 大井	まりこ 真理子	47歳	大阪府
	入選	思い、届くことを願って	すけがわ 祐川	なおこ 尚子	55歳	北海道
		患者の手から感じる思いに触れて	しなざわ 品澤	かずし 一寿	39歳	東京都
		笑顔を引き出す看護	ほりい 堀井	みどり 緑	30歳	神奈川県
		起死回生の誕生日	かなざわ 金澤	かおり 佳織	45歳	京都府
		かえって来てよかった	わた 和田	きょうこ 京子	40歳	岡山県
一般部門	最優秀賞	静かな勇氣	たかの 高野	ゆうこ 裕子	49歳	滋賀県
	内館牧子賞	未蕾（みらい）	おかもり 岡森	ようこ 陽子	31歳	大阪府
	優秀賞	川柳セラピー	るいけ 類家	こすえ 梢	41歳	青森県
		やさしい声	たにぐち 谷口	はるこ 治子	49歳	東京都
		告知日に開いた“幸せへの扉”	おのだ 小野田	まゆみ 真由美	40歳	京都府
	入選	魔法	ふくし 福士	かつひさ 勝久	83歳	北海道
		看護師さんの昼寝	いがらし 五十嵐	かずお 一男	74歳	福島県
		ホタルの光に癒されて	かとう 加藤	なみ系 なみ系	66歳	埼玉県
		命を与えてくれたチュー	かしわざ 柏木	すみえ 澄江	65歳	神奈川県
		願いごと	やまもと 山本	じゅん 潤	40歳	静岡県

■第6回「忘れられない看護エピソード」概要

- 【部門・応募資格】： ①看護職部門：現在、国内で看護職に就いている方、または過去に看護職に就いていた方
②一般部門：日本国内在住の方
- 【募集内容】：「看護」を通して得られた忘れられない思い出やエピソードについて800字以内で応募。
作品には必ずタイトル（題名）を付記。
- 【募集期間】：2015年11月16日（月）～2016年2月19日（金）
- 【表彰・副賞】：
■最優秀賞…賞金20万円（各部門1作品）
■内館牧子賞…賞金10万円（各部門1作品）
■優秀賞…賞金3万円（各部門3作品）
■入選…「看護の日」オリジナル「ナースシティ2016」ぬいぐるみ（各部門5作品）
■応募者全員…第6回入賞作品収載の小冊子
- 【審査員】：特別審査員 内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員 剛力彩芽さん（「看護の日」PR大使、女優）
厚生労働省・日本看護協会関係者などで審査
- 【主催】：厚生労働省、日本看護協会

<看護の日について>

「看護の日」（5月12日）は、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなんだもので、中島みち氏（ノンフィクション作家）の発案・呼び掛けにより日野原重明氏（医師）、橋田壽賀子氏（脚本家）、柳田邦男氏（作家）など市民・有識者による「看護の日の制定を願う会」の運動をきっかけとして、1990年に制定されました。以来、5月12日を「看護の日」、この日を含む日曜日から土曜日までを「看護週間」（今年は5月8日～14日）とし、毎年、厚生労働省と日本看護協会が中心となり、全国各地で看護に関係したイベントや活動を行っています。



【最優秀賞 看護職部門】

専属ナース物語

しょうさき み え
庄崎 美恵さん 37歳 〈長崎県〉

「お前は最低の看護師だ！」

これは、2013年の寒い冬の夜、ある患者さんから言われた言葉です。「ある患者さん」というのは、私の父です。

父は肝硬変を患い、私が勤務する病院に入院し、治療を受けました。その闘病生活はとても厳しいものでした。私は介護休暇を申請し、そばに付き添う生活を送りました。看護の仕事に就いて15年。初めての経験でした。

私は、看護師であるプライドと家族からの期待を裏切らないように、毎日自分の力の限り、必死で付き添いました。しかし、父は夜間にせん妄状態になることがあり、そのたびに「なんで私を困らせるの？」とつぶやきながら、布団に潜り込んで号泣しました。

「お前は最低の看護師だ！」という言葉も、せん妄状態の父が発した言葉でした。私は、父から言われたというショックと、看護師としてのプライドが一気に崩され、父の部屋を飛び出し、待合所で号泣しました。そして、いつの間にか寝てしまいました。

その夜に不思議な夢を見ました。幼い私と若い父。私が楽しそうにワープロを教えてもらっている風景。次は、苦手だった数学を教えてもらっている風景。次から次に場面が展開し、まるで物語のような夢を見ました。気付くと窓から日が差していました。その朝は、とても不思議な気持ちになり、逃げ出したはずの父の病室に自然と駆け寄りました。

父の寝顔を見て「もしかして、今度も私に何かを教えたいのかもしれない」という思いが私の心の中に舞い降り、その瞬間に柔らかい涙が頬を流れました。

その日から、夢の続きの「専属ナース物語」が始まりました。

介護休暇が終わり、仕事に復帰した私は、日中は看護業務を、夜間は私服に着替えて父の付き添いをしました。父は、白衣を着た私には厳しく、あいさつや立ち姿、環境整備などを細かく評価し「お前は心遣いが足りないことが多すぎる」「お前の看護はアイデアと発明が足りない」といった感じで、毎日叱ってくれました。でも、白衣を脱いで「娘」に戻ると「お前の仕事は大変だ。体を大事にしろよ」と温かい声を掛けてくれました。

いつの間にか、家族の病気という大きな出来事も、私に与えられた素晴らしい時間なんだと思えるようになりました。

「お前もいい看護師になってきたな」と言ってくれた1カ月後、父は家族に囲まれて旅立ちました。

時が経ち、父の友人から「お父さんは『俺の専属ナースは最高の看護師だ』って、美恵ちゃんのことをいつも自慢していたよ」という話を聞きました。そのとき、涙があふれ、目の前の父の写真がゆがんで見える中、「お前に合格点をやる。専属ナースはたくさんの人を助けなさい」という声が聞こえた気がしました。

私は、今もその場所で働いています。時に叱り、時に褒めてくれた父の言葉を胸に、私のナース物語は、これからも続きます。

しょうさき み え
■ 庄崎 美恵さんによるコメント

父が亡くなってちょうど一年が経ちますが、(作品を応募するにあたって)今回は自分の気持ちを整理したり、看護を振り返ったりすることができて、とても良い機会になりました。父のために介護休暇を取りたいと言ったその日からすぐに介護休暇を取らせてもらえるような、すごく理解のある同僚に恵まれて、良い職場で働かせてもらっていると心から思いました。私は長崎県内の小さい病院で働いていますが、日ごろから全国の看護師が働きやすく、自分らしく看護師を続けていけるような、環境を整えてくださっている方々に本当に改めて感謝ができる機会になったと思っています。(剛力さんが自分のエピソードを朗読しているのを聞いて)涙が止まらなかったです。

父もこの会場のどこかで、誇らしげにしていると思います。

【最優秀賞 一般部門】

静かな勇氣

たかの ゆうこ
高野 裕子さん 49歳 〈滋賀県〉

12年前の冬、ある病院で私の夫は最期の時を迎えようとしていました。まだ35歳。闘病の3年間、手術や抗がん剤治療を繰り返しながら、当時はまだ珍しかった病院内での「患者と家族の会」も立ち上げ、精一杯、病氣と闘ってきました。そして、よく笑う幼い2人の子どもたちと穏やかで幸せな日々を送っていました。

しかし、病は夫の体の自由を奪い、感覚を奪い、次第に意識をも奪っていきました。痩せた体は驚くほど脚がむくみ、私一人では抱えきれない状態になりました。

そんなある日、私は夫の着替えを手伝ってくれている看護師のUさんのお腹が大きくなっていることに気付きました。もっと早く気付いても良かったはずですが、日ごろからお腹をかばう様子も見せず、いつもキビキビと動き回る姿はとても妊婦さんには思えなかったのです。

遠慮がちにUさんに聞くと、やはり赤ちゃんがいるとのこと。すぐほかの看護師さんに代わってもらおうようお願いしました。が、Uさんは聞き入れてくれません。夫の体は相当な重さです。夫の体を抱えたとき、ベッドの縁がUさんのお腹に当たりぐにゅっと食い込むのが見えて、思わず声が震えました。

「お願いだから誰かに代わってもらいましょう。彼はとても子どもを大切にします。もし彼が話せたら、きっと『やめて』って言うと思います。だからもうやめて、お願いだから……」

その時、必死で懇願する私にUさんは言いました。

「実は、私はあしたから産休に入ります。きょうが高野さんのお世話ができる……たぶん最後の日になると思います」

「最後の日」と言うUさんの顔がゆがみました。全ての意味を含んでいるのが分かりました。「私たちは今まで高野さんと奥さんのがんばりをずっと見せてもらっていました。諦めない明るいお二人を見ながら、今のどうしようもない現実がとてもつらいです」。その目は真っ赤で、今にもこぼれそうなほど涙が浮かんでいました。

「高野さんの姿を見ながら、この子が生まれる意味を私はとても感じさせてもらっています。だから今日は私にやらせてください。絶対、無理はしませんから……」

その後、Uさんと私は一緒に泣きながら、笑いながら、そして夫とお腹の中の赤ちゃんに話し掛けながら、時間をかけて夫の着替えを終えました。

逝くことと生まれくること……。そして、それらに添って見守ることを私たちはそれぞれの立場で共有していたのでしょ。それは、途方もなく寂しくて、温かく優しい時間でした。

現在、私は「入院患者と家族のためのサポートハウス」を作ろうと奮闘しています。小さくてもいいのです。あのときもらった優しい時間と静かな勇氣を同じ立場の誰かに届けたいと思っています。

あのときの赤ちゃんは、きっともう12歳。あの日からずっと会いたいと思っています。忘れたことはありません。Uさん、もし会えたら抱きしめてもいいですか？

「あのときは、協力してくれてありがとうね。あなたと、あなたのお母さんがくれた勇氣を、今でもうれしく覚えているのよ」

たかの ゆうこ

■高野 裕子さんによるコメント

あの時のことをいろいろと思い出し、ちょっと複雑な、でもあたたかい気持ちになりました。このような賞をいただき、心から嬉しく思っています。

応募したエピソードは、12年前から夫や看護師さん、看護師さんのおなかの中にいた赤ちゃんに向けて大事にしてきた、今でも私を支えてくれる出来事です。同じような状況にある看護師さんや、患者さん、ご家族の方などが、苦しい気持ちを抱えながらも一緒にあたたかい気持ちになれる、その一歩をお手伝いできるようなきっかけになれば嬉しいです。

【内館牧子賞 看護職部門】

「教える」よりも「聴く」

なかむら

なみこ

中村 凡子さん 44歳 〈富山県〉

「もう、おっぱいをやめたいんです」

Mさんは、思い詰めた表情で私に訴えた。「母乳で育てたい」と、出産直後から人一倍努力してきたお母さんである。母乳の量は少しずつ増え、赤ちゃんも順調に育っていたが、おっぱいの痛みが良くならないのが悩みで、母乳外来に通っており、この日は私が担当であった。

自分の母乳で赤ちゃんを育てる——。ごく自然で、そして掛け替えのない体験だ。しかし、知識や支援を得る機会がないために、途中で諦めてしまうお母さんがたくさんいる。かつての私もその一人だった。だから、助産師になってからは、一人でもそんな人が少なくなるようにという思いでやってきた。

けれど「今はとにかくMさんの気持ちを聴かなければならない」と思った。せきを切ったように彼女は話した。母乳の良さがよく分かっているからこそ、ずっと悩んでいたこと。でも、痛みが強くて、体中がつかなくて、今は授乳に恐怖を感じることに。

母乳育児支援を行う専門職として、言いたいことはたくさんあった。でも「育児を楽しいと思えなくて」というMさんの言葉に、私はそれを全部飲み込んだ。

「今まで精一杯がんばりましたね」

聴き終えた私がそう言うと、Mさんの目から涙があふれた。

それから、母乳を中断するためにアドバイスをし、Mさんを見送った後、無力感に包まれた。Mさんの思いをかなえるために、もっと何かできたのではないか。取り返しのつかないことをしたのではないか……。

ところが後日、私の顔を見て駆け寄ってきてくれた彼女は言った。

「あの日、話を聴いてもらって、気持ちがすごく軽くなって、おっぱいの痛みが楽になったんです。やめる理由がなくなりました。本当にありがとうございました」

教えることより「聴くこと」の力を実感した瞬間だった。その後約1年半、母乳を続けたと後に聞いた。「母は強し」とよく言うけれど、ちょっとした支えがあれば、もっと強く、優しくなれるのだ。そんな手助けができるこの仕事、当分辞められそうもない。

【内館牧子賞 一般部門】

未蕾（みらい）

おかもり

ようこ

岡森 陽子さん 31歳 〈大阪府〉

いつものように、待合室で絵を描いていた。まだ、夢はなかった。

17歳で甲状腺疾患を患った私は、この日も検査で病院にいた。時間だけはあるので、一人で絵を描いていた。すると、なじみの看護師Sさんが声を掛けてくれた。

「上手だね。私にも描いて。クマさんとウサギさん。お願いね」

柔らかい口調の中に芯の強さを感じた。彼女はとうとうもりで、こんな言葉を発したのだろう。数日後、完成させた絵を彼女に渡すと、お礼と一緒に勘違いにも取れる言葉が返ってきた。

「売ればいいのに。画家になって」

夢みtainなことで生きていけるのか、と思った。しかし、それは生きていくための夢だったのだ。その言葉により、私の夢は動き出した。

半年後には、あるギャラリーのオーナーの方と縁あって出会い、さらにその半年後には個展開催を成功させることができた。

「売ればいいのに。画家になって」

たった一言の“コトバ”のパワーを思い知った。「看護」とは、きっとその人の将来のことも責任を持って「看る」ことなのだろう。「見守られている安心感」とは、とてつもなく大きな力に変換される。その2年後には、2回目の個展を開催することができた。そして現在、私は「オーダーメイドの貼り絵やさん」として生きている。

生きていくために「夢をみる」。大切なことを教わった。

彼女は、私にとって「恩師」であり「お母さん」であり、そして何より「看護師」だったのだ。

※題名の「未蕾」は、「今はまだ蕾だけれど、たくさんの可能性を秘めている」という意味の造語です。

第6回「忘れられない看護エピソード」を様々な場所でお楽しみいただけます。

「忘れられない看護エピソード」入賞作品展！
一般部門 最優秀賞作品のショートムービー公開！
「冊子プレゼント」で感動をお届け！

■第6回「忘れられない看護エピソード」入賞作品展

日本看護協会ビル3階「JNA プラザ」で、最優秀賞、内館牧子賞、優秀賞、入選の20作品を展示します。ご来場の方には、入賞作品を収めた冊子「第6回『忘れられない看護エピソード』集」をさし上げます（入場無料）。

- 期間： 5月9日（月）～6月30日（木）（入場無料）
- 時間： 10：30～17：00（13：00～14：00 を除く） ※土・日曜は休館

■第6回「忘れられない看護エピソード」一般部門 最優秀賞作品「静かな勇氣」映像公開

今年度は、一般部門 最優秀賞に入賞した「静かな勇氣」をショートムービー化しました。この映像を本日より、日本看護協会ホームページ（<http://www.nurse.or.jp/>）で公開しています。なお、上記の入賞作品展でも上映いたしますのでぜひお越しください。



■第6回「忘れられない看護エピソード」集をプレゼント

入賞作品を収めた冊子「第6回『忘れられない看護エピソード』集」をご希望の方にプレゼントします（お1人様1部、送料無料）。

下記事項を明記の上、はがき、FAX、Eメールのいずれかでお申し込みください（数がなくなり次第終了）。

- ① 郵便番号 ②住所 ③氏名 ④年齢 ⑤職業 ⑥電話番号

<申込み先>

- はがき： 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-8-2
公益社団法人 日本看護協会 広報部「冊子プレゼント」係
 - FAX： 03-5778-8478（件名に、「冊子プレゼント希望」と明記）
 - mail： koho@nurse.or.jp（件名に、「冊子プレゼント希望」と明記）
- ※記載いただいた個人情報は、冊子の発送のみに使用します。

